



絵本作家 おーなり由子

なにが、どううちゅうことない

「今な、駅におるんや——」

十二年前の春のこと。

突然、父から電話がかかってきた。聞き慣れた声。実家は大阪で、わたしは東京の国分寺に暮らしている。

「蕎麦食いに行ったら、思てな。新幹線、乗ってきた」
おどろいて、自転車ですべてで迎えに行った。

もともと気ままでせっかち、ひとりですら行動する父だった。食べるのが好きで、東京に来ると必ず行く、気に入った蕎麦屋があった。だからって。平日の昼、突然、わざわざ新幹線で？ 何かあったんやろか。

心配して駅に行ったら、近所に住んでる人みたいに「おう」と笑っていた。夫に連絡したら、早めに帰ってきてくれたので、三人でお蕎麦を食べにいった。

「なにが、どううちゅうことない」

話の途中、父は大きい声で何回も言った。その頃の父の口癖だった。声が大きいのはいつものことで、普通の会話でも、遠くで聞いていた人に「ケンカでもしてるのかと思った」とよく笑われていた。人と話すのが好きな父だが、話は下手くそだった。だからか、仕事がいまいかない時も「なにが、どううちゅうことない」。友人が亡くなった時にも「なにが、どううちゅうことない」。誰かに迷惑かけてしまった時も、かけられた時も——
「なにが、どううちゅうことない」。

関西弁だが、なんというか、「何も、たいした問題はない。無事に生きてるんやから問題無し」というような感じなのだけど、「それ以上言うな」と制してるように思えたり、何でもかんでも、その言葉で話を終わらせんという。と突っ込みたい時もあった。

その日も、いつもの調子、と聞いていたら、「なにが、どううちゅうことない」と言ったそのあと、一瞬、父が涙ぐんだ。そして、もう一度すぐに「なにが、どううちゅうことない」と、煙に巻いた。わたしは、はっとしたが、きけなかった。その数ヶ月後、父はがんが見つかり、あっという間、ひとりで亡くなった。

死ぬことですら「なにが、どううちゅうことない」と天国から言ってる気がしたほど、あつかなかった。

あの時、父は病気のことで知らなかった。あの涙は何だったのか。わたしはきかなくて良かったと思う。

すべてはたいした問題ではなく、あの日、父はわたしに会いたかったのだ。それで、ぜんぶだ。

「なにが、どううちゅうことない」

父がいなくなってから、こどものようにこの言葉が聞こえる時がある。たとえば、今いる場所に立ちすくむような時、耳慣れた声で。聞こえる。

父の、どこか勝手に思えたこの言葉が、今は自分をささえる、おまじないのようになっていく。



1965年、大阪府生まれ。絵本作家、漫画家。主な著書に『ことばのかたち』（講談社）、『あかちゃんがわらうから』（プロンズ新社）、『ひらがな暦』『幸福な質問』『モモ』（新潮社）、『365日のスプーン』『きれいな色とことば』（大和書房）、『てのひら童話1〜3』（角川書店）、『おふろでストロー』（福音館書店）など。エッセイや翻訳、子どもの歌の作詞も手がける。

CONTENTS

わたしとことば なにが、どううちゅうことない おーなり由子

特集 02 新版『国語』教科書 Q&A

新版『国語』教科書 Q & A

新しい教科書、私ならこう使う

安田恭子
邑上裕子
桂 聖

デジタル教科書を使いこなそう 3 16 「話す・聞く」動画でモデルを共有する 佐藤幸江

子どもたちを「書写好き」に特別編 20 新版『書写』教科書 Q & A

なるほど国語指導 3 24 子どもあつての指導案 作・画／あべかよこ
監修／興水かおり

平成27年度用教科書 誤りのお知らせ
教科書の変更に伴う取り扱い内容の異動について

特集

新版『国語』 教科書

Q & A

新しい教科書では、子どもたちの言葉の力を育むため、これまで以上にさまざまな工夫をしています。今回の特集では、先生方からいただいたご質問に答える形で、その一部をご紹介します。また、新教材を使って、どんな授業が考えられるかのヒントを、経験豊かな先生方にお聞きしました。



言葉と楽しく、一歩ずつ

——新版教科書に込めた願い

光村図書出版 小学校国語編集部

学ぶ楽しさを
実感させる

実感させる

確かな力を
培う

培う

新版教科書を編集するにあたり、私たちは、光村図書の国語教科書で学ぶ児童に、「言葉で感じ、考え、想像し、自分の言葉で語ることができる」ようになってほしいと考えました。

児童は、言葉を使って気持ちや考えを伝え、これからの時代を生きていきます。そのためにも、確かな「言葉の力」を育てる教科書であるよう、編集に努めました。加えて、予期しないさまざまなことが起こる昨今の社会状況の中にあつて、児童が確かな「生きる力」を獲得できるよう、「主体的に関わる」「いつも問い続ける」「しなやかに生きる」姿勢を育みたいと考えました。こうした児童の姿を思い描きながら、「学ぶ楽しさ」と「確かな力」の二つを、編集の大きな柱に据えました。

国語の学びは、言葉との出会いであり、言葉を通じた他者との出会いです。その出会いが、児童にとって楽しく、豊かなものであってほしいと考えました。

新版教科書では、児童の関心を喚起する多彩なテーマと、確かな表現や論理性をもった作品・文章を追究するとともに、長く受け継がれてきた古典や昔話、四季折々の美しい言葉を掲載しました。

また、国語の学習開き、学級づくりから言語活動まで、あらゆる場面に、コミュニケーションの楽しさを味わえる教材を用意しました。すべての児童が人とつながり、その楽しさを存分に味わってほしいと考えます。

国語は「何を学習するのか分からない」と言われがちです。そんなご意見を受け、新版教科書では、「何を学ぶのか」「どのように学ぶのか」「何が大事なのか」がひと目で分かるようにしたいと考えました。そして、身につけた言葉の力で未来を切りひらいていく児童を育てることを目指しました。

そこで、学習目標を明確にし、知識・技能の整理から振り返りまでを提示しました。これらを通して、何を、どのように学ぶのか、どんな力を身につけるのかを明らかにし、児童の主体的な学びを実現することを目指しました。

幼稚園や保育所との連携は、どう図られていますか。

1A

小学校入学前までの体験を生かしながら、学習を楽しく
一歩ずつ進められるような入門期の構成としました。

小学校での学習の根底には、入学前の体験があります。そして、小学校での学習は中学校へと続いていきます。新版では、そのようなつながりを意識して編集しました。特に、小学一年生の教室で「小1プロブレム」が問題になっていることを踏まえ、入学したばかりの児童が小学校の学習をスムーズに進めていけるよう、さまざまな工夫をしています。

第一教材「あさ」

新版教科書の入門期第一教材「あさ」は、詩や挿絵からたくさんの言葉があふれてくる教材です。ここには、「つながる」「まるくなる」「みんな なかよし」など、入学したばかりの児童に最初に出会ってもらいたい言葉を掲げています。これらを声に出して読んだり、絵の中の子どもたちと同じように体を動かしてみたりして、心と体で言葉に出会ってほしいと思います。

「あさ はじめよう」

第一教材「あさ」に続いて、児童の「小学校で学ぶ」という大きな期待を大切にしながら、「学校って楽しいところ」という実感をもたせられるような教材を新設しました。編集部では、この教材群を国語学習の「スタートブック」と位置づけ、紙面に緑色の縁取りを施し、他の教材との違いがひと目で分かるようにしました。

「さあ はじめよう」で、児童は、これまでに体験的に知っていることや身につけてきたことを、国語・言葉の学習という観点で改めて見つめ直します。その姿から、先生方は、それぞれの児童が、すでに分かっていること、まだ分かっていないことを見取ることができます。児童を「小学校の学習」へスムーズに導入できるように、ぜひこの教材を活用していただきたいと思います。ここで扱っている内容は、一年生の間だけでなく、その後の学校生活、さらには社会生活の基礎となるものです。学習が進んでからも、折に触れてこのページに戻ること、基礎を確かめていただきたいと思います。

▼「なんて いおうかな」(1年上P10-11)



▲「こえの おおきさ、どう するの」(1年上P18-19)



「さあ はじめよう」教材一覧

- なんて いおうかな……学校生活の言葉を知る。
- どんな おはなしかな……お話に出会う。
- 姿勢と鉛筆の唱え歌……正しい姿勢で、正しく持つ。
- どうぞ よろしく……初めて名前を書く。
- こえの おおきさ、どう するの……適切な声量を知る。
- うたに あわせて あいうえお……「あいうえお」と出会う。
- ことばをつくらう……文字に親しむ。



▲「あさ」(1年上P1-8)



言語活動を通して国語の力を身につけさせるために、
どのような工夫をしていますか。

2A

単元冒頭に、つきたい力と言語活動を大きく見やすく示しました。特に「読むこと」では、学習の流れを常に意識しながら学習活動に取り組めるよう、手引きの紙面を構造化しました。

きつつきの商売

1 場面：きつつきが、お店を開きました。

きつつきは、きつつきにびったりのお店です。きつつきは、森の中からは、えりすぐりの木を見つけてきて、かんばんをこしらえました。かんばんにきぎんだお店の名前は、こうです。おとや

林原 玉枝 作
村上 康成 絵

単元名は、「つきたい力」と「言語活動」で示しました。手引き冒頭にも単元名を繰り返し提示したので、学習目標がいつでも確認できます。

きつつきの商売

1 場面：きつつきが、お店を開きました。

きつつきは、きつつきにびったりのお店です。きつつきは、森の中からは、えりすぐりの木を見つけてきて、かんばんをこしらえました。かんばんにきぎんだお店の名前は、こうです。おとや

林原 玉枝 作
村上 康成 絵

導入では、感想を問い、作品・文章を読む視点と言語活動の全体像を示しました。児童の学びを耕す場です。

きつつきの商売

1 場面：きつつきが、お店を開きました。

きつつきは、きつつきにびったりのお店です。きつつきは、森の中からは、えりすぐりの木を見つけてきて、かんばんをこしらえました。かんばんにきぎんだお店の名前は、こうです。おとや

林原 玉枝 作
村上 康成 絵

下段に示された言語活動を通して、上段の課題に取り組むことで、身につきたい力を常に意識しながら学習活動を行うことができます。

きつつきの商売

1 場面：きつつきが、お店を開きました。

きつつきは、きつつきにびったりのお店です。きつつきは、森の中からは、えりすぐりの木を見つけてきて、かんばんをこしらえました。かんばんにきぎんだお店の名前は、こうです。おとや

林原 玉枝 作
村上 康成 絵

「たいせつ」には、単元でつきたい力のポイントをまとめています。

児童が目的意識をもって、主体的に学習を進められるように、単元名を大きく見やすくしました。また、「読むこと」の学習の手引きは、単元名の流れが見開きで捉えられるようにするとともに、二段組み構成で紙面の構造化を図りました。

単元全体の流れを見開きで捉える

「目標を確認する」「課題に取り組む」「学習を振り返る」という学習の流れを一覧して確認できるようにしました。見開きの紙面の中で、そこでの学習全体を見渡せます。

二段組み構成で、力を身につけ、充実した言語活動を行う

三年以上の手引きは、二段組みの構成になっています。上段には読む力を育む「よりよく読むための課題」を、下段にはその単元で設定している言語活動を手順に沿って示しました。二段組みの構成によって、言語活動と教材の読み取りを一体化させた形で学習を進めることができます。

学習したことをもとに、自分の考えをもつ

これらの学習をもとに自分自身の考えをもつことができるよう、「自分の考えをもとう」という課題を設けています。自分自身の中や、学習材の外に答えを見つける問いです。「あなたは自身はどう考えるか」を問うことで、「自ら考える子ども」を育てます。

他にも……

虫眼鏡マークのコナーでは、学習用語を取り出して解説したり、その学習で使った話型・文型を示したりしています。

この本、読もう

教材末の「この本、読もう」では、学習した作品・文章に関連した本を紹介しています。教科書から読書の世界が広がり、より本に親しむことができます。

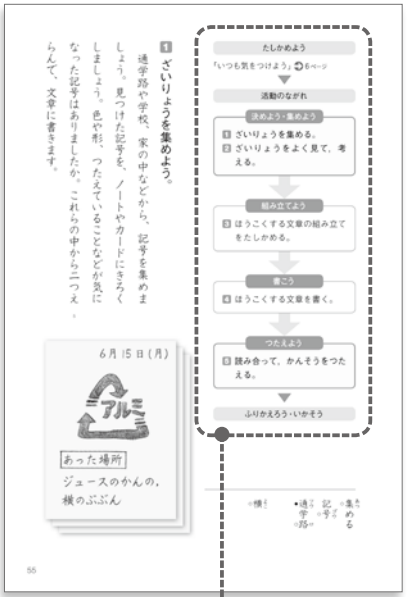
Q3

「話すこと・聞くこと」「書くこと」では、どのような工夫をしていますか。

3A

単元冒頭に「活動の流れ」を示し、学習活動の手順と、その単元での重点が分かるようにしました。また、実の場がイメージできるような学習場面を設定し、学んだことを日常生活に生かしていけるようにしました。

▼「気になる記号」（3年上P55）



「活動の流れ」で見通しをもち、重点を確かめられるようにしました。

「読むこと」の単元と同様に、単元名を大きく見やすく示しました。そのうえで、児童が主体的に学習に取り組めるよう、「話すこと・聞くこと」「書くこと」の単元では、冒頭の「活動の流れ」や学習活動そのものを工夫しています。

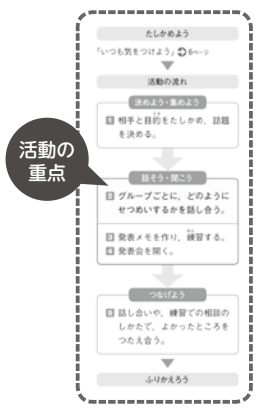
単元冒頭の「活動の流れ」では、学習全体を見通せるようにしたうえで、学習の重点箇所当たる項目を黄色で示して目立つようにしました。児童にとって学習の中心が分かるだけでなく、先生方が、授業の中で活動を焦点化する際の参考にもしていました。

また、どの単元においても、学習の場が

イメージしやすく、日常生活に生かしていけるような言語活動を設定しました。自分たちの周りから材料を探そうことができたり、教科書に示された活動が自分たちの学校生活や日常生活とつながっていると感じられたいするものを、学習活動として提案しています。

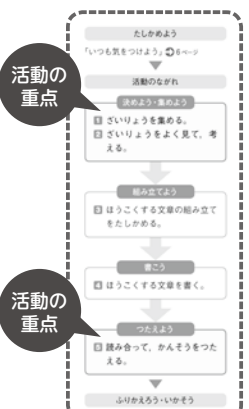
その際、児童がゴールを意識して学ぶことができよう、教材中の作例や発表例を、できるだけ全体の形が見えるように示しました。なかでも、「話すこと・聞くこと」単元では、学習指導書付録CDをお使いいただくことで、活動の様子を音声で確かめ、具体的に想起できるようにしています。

「話すこと・聞くこと」



単元を三つのステップで示しました。

「書くこと」



単元を四つのステップで示しました。

Q4

これまでに学習したことを振り返ったり、力を定着させたりするための工夫はありますか。

4A

学習の中でいつでも活用できる資料や、学習の系統性が見える資料を、豊富に用意しました。

①領域別教材、②身につけたい力（指導事項）、③その学年の教材、の三つを一覧する機能をあわせもったページを新設しました。

上下巻冒頭の「いつも気をつけよう」には、前学年や上巻までに学習した内容をまとめました。また、継続して取り組みたい内容を「続けてみよう」で示しました。

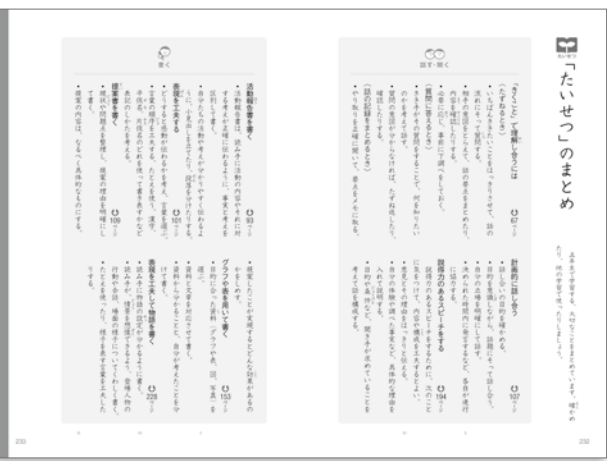
その学年に出てきた「たいせつ」を、領域別にまとめて掲載しました。既習事項を参照したり、これから学習することを確かめたりする際に用いることができます。



▲「3年生の学習を見わたそう」（3年上P4・5）



▲「いつも気をつけよう・つづけてみよう」（3年下P6・7）



▲「『たいせつ』のまとめ」（5年P232・233）

入門期

「繰り返し丁寧に」を心がけて

元新宿区立西戸山小学校教諭

安田恭子

教科書と出会う瞬間を大切に

入学してくる子どもたちは、みんなが同じスタートラインにいるわけではありませんが、どの子も小学校生活に大きな期待をもっており、とりわけ「勉強」を心待ちにしています。そんな子どもたちを前に、最初に教科書を開くとき、私はまず表紙を見せ、「どきどきするね。何が載っているのかな」「さあ、開くよ」と言葉にするようにしていました。

子どもたちの中には、もらった教科書をもう開いたという子もいるでしょうが、「みんなで勉強する」楽しさは特別なものです。新しい教科書を手に、先生もわくわくしているという気持ちが伝わるように、投げかける言葉を工夫してみてください。

自由に思いを伝え合うことから

入門期第一教材は「あさ」です。絵を見た子どもたちは、たくさん発見をします。最初は「木がある」「この子は走っているよ」と、絵にあることを見たま言葉にしているのが、だんだんに「この子は、『あつ、鳥だ』と言っているよ」「手をつないで、うれしそうにしている」というふうで、自分の想像を言葉にするようになります。文字に注目する子がいたら、それも認めてあげていいですが、先生のほうから無理に文字に注目させようと急ぐ必要はありません。発見や思いを伝え合い、聞き合う中で、クラス全体にお互いのよさを認め合う気持ちも生まれます。

また、授業の終わりには、「今日は、こんなことができるようになったね」「しっかり声が出せたね」と言葉にして、子どもたちに成長を実感させたいものです。

基礎的な学習習慣の定着を

「さあ はじめよう」には、学校生活の言葉を知る、お話に出会う、正しい姿勢で鉛筆を持つなど、身につけてほしい基礎的な学習習慣が分かりやすく紹介されています。

これらの学習習慣を日常生活の場に広げ、定着を図るためには、掛図などを活用して、子どもたちの目に触れる場所にいつも示しておくことも有効ですが、ここでも先生の言葉かけが大きな意味をもちます。授業の終わりに「家でもやってみようね」と投げかけたり、運動場や公園で、「声の大きさは、どうするのか」と確かめたりします。「あいうえお」のなぞり書きをするときも、ただ書かせるのではなく、「ここはきちんと止めて、おしまいのところはすうっと書くのよ」と言葉を添えることが大切です。

時には、「昨日勉強したこと、遊びの時間にやってみたよ」と、子どものほうから言ってくることもあります。そんなときは、その子の言ったことをみんなに紹介して、大いに褒めてあげるようにしましょう。

教材はさまざまな場で活用する

私は、低学年を担当する若い先生たちに、「繰り返し丁寧に」ということをよく言います。教科書の教材は、「一回学習したら終わり」ではなく、別の学習の場でも有効に活用することができます。

一年上巻には、「かきと かぎ」「ねことねっこ」「おばさんとおばあさん」「おもちゃとおもち」の唱歌が配られています。それぞれ濁音・促音・長音・拗音を学ぶ短い詩ですが、そこで扱って終わるのではなく、別の教材を学習しているとき、「ちよつと読み方を確かめてみましょう」とページをめくり直し、みんなで声に出して読んでみることもできます。一時間の授業の中にそんな学習を取り入れても、多くの時間はかかりません。反復することで定着が図れると同時に、子どもたちも繰り返しを楽しむようになります。

入門期は、それからの国語学習の基礎を培う大事な時期です。学年が上がれば、当然学習のレベルも上がり、基礎の部分に立ち返ることも難しくなります。そのために「繰り返し丁寧に」教科書を活用し、楽しく学習することで、確かな力を身につけたいものです。



▲「あさ」(1年上P1)



▲「かきと かぎ」(1年上P28)



▲「ねことねっこ」(1年上P42)



やすだ・きょうこ

福島県生まれ。日本国語教師の会、樺の会会員。共著に『小学校国語科学習指導の研究』シリーズ(東洋館出版社)、『どの子も書ける! 全教科で役立つ「記述力」UPの授業21』(明治図書)などがある。

話す・聞く
書く

みんなが参加する主体的な学習の場

明星大学 特任准教授

邑上裕子

話すこと・聞くこと

クラスづくりにつながる場を

二年以上の学年初めに新設された「言葉の準備運動」の系列は、子どもをリラックスさせると同時に、コミュニケーションの素地をつくることができます。「じゅんばんに ならぼう」(二年以上)は、話をよく聞いて、みんなが声を出さないと成り立たないゲームですし、「ばらばら言葉を聞き取ろう」(四年以上)は、注意深く聞き取らないと答えを当てるできません。こんな体験を積むことで、思ったことを安心して言い合える関係が生まれ、それからの学習活動に全員が参加しようという気持ちになるはずです。

友達にインタビューして他己紹介する「教えて、あなたのこと」(五年)や「つないで、つないで、一つのお話」(六年)など、発達の段階に応じた工夫もされています。

す。短時間でできて、道具もいらない活動ですから、学期の初めだけでなく、朝の時間などに、随時取り入れてください。

主体的に聞く力を高める

新しい教科書は、「話す」「聞く」「話し合う」という三つの系列になっていますが、特に目を向けてほしいのが、「聞く」の系列です。聞くことの指導は、過去において、態度面が重視されてきたくらいがりましたが、これから求められるのは、主体的に聞く力です。「ともさんは どこかな」(二年以上)や「聞き取りメモの工夫」(四年以上)では、聞くためのスキルを身につけることができます。また、「よい聞き手になろう」(三年以上)では、自分の考えをつくるため、相手から聞き出し、聞き分けるという学習活動が位置づけられています。

どれも、子どもたち一人一人が目的を

もって、主体的に聞く(受けて返す)ことができるよう教材化されています。国語科に限らず、他の教科の学習にも生きるものです。そんな機会に、国語の教科書を開いて確かめることで、活動の深まりが期待できます。聞く力が身につけば、話し合い活動もより充実したものになるでしょう。

見通しをもって学習を進める

高学年には、「明日をつくるわたしたち」(五年)、「未来がよりよくあるために」(六年)という教材が位置づけられています。資料(話題)をきっかけに、みんなで情報交換し、自分の考えを文章にまとめるという学習です。話すこと・聞くこと、書くことが複合された活動だけに、子どもたちに学習の道筋や見通しを理解させることが重要になります。そのためには、教材の最初のページにある「活動の流れ」が、有効なヒントになるはずです。

書くこと

多様な文種と出会う

新しい教科書では、観察・記録・説明・報告・紹介など、多様な文種を書く活動が、例文と合わせて紹介されているので、文種による書き方の違いやおもしろさが、子どもたちにも伝わるはずです。新しく登場した「たから島のぼうけん」(三年下)は、教科書にある地図を見て物語を作る学習ですが、地図を見ながら、「何を持って行くか」など、話し合いの活動に広げることができます。各教材にある例文は、どれも発達の段階に見合ったものですが、例えば「わたしの研究レポート」(四年以上)では、ここにある例文を参考にして、先生方がクラスの実態に合った文章を作り、言い回しや表現の指導につなげることも可能です。

教科書を上手に活用する

教科書の中には、どの学習においても活用できる汎用性ある情報があります。これは書くことに限らず、すべての学習に共通することです。私が、特におすすめたのは、各巻冒頭にある「いつも気をつけよう・続けてみよう」と巻末付録「たいせつ」のまとめです。主体的に学習を進めるための助けとして、いつでも使えるものから、ぜひ注目してください。(談)

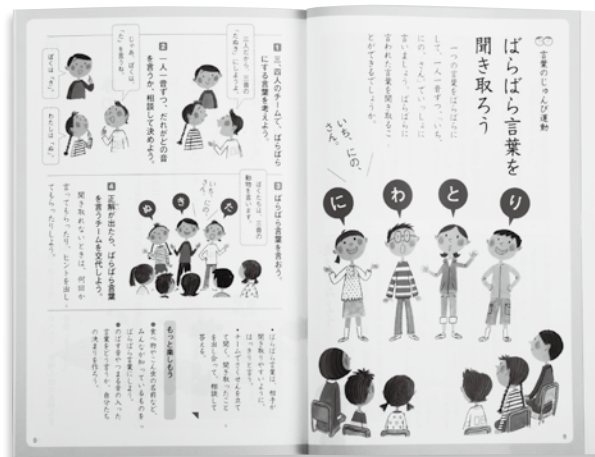


むらかみ・ゆうこ

東京都生まれ。日本国語教育学会常任理事。共著に、『はじめて出会う古典作品集』(光村教育図書)、『未来に生きる話し手・聞き手を育てる「話し言葉」の学習』(光村図書出版)などがある。光村図書小学校「国語」教科書編集委員。



▲「たから島のぼうけん」(3年下P64-65)



▲「ばらばら言葉を聞き取ろう」(4年上P8-9)

読む

自分に引き寄せる楽しさを

筑波大学附属小学校 教諭 桂 かつら 聖 さとし

文学的文章

「自分だったら」と考えてみる

一年上巻に、「ゆうやけ」という作品が登場しました。新しいズボンがうれしくてどきどきしていたのに、遊んでいるうちに夢中になって忘れてしまう主人公の姿は、低学年の子どもたちの経験と重なるものです。「自分と似ているところはないかな」と投げかけると、次々に発言が生まれるはずですよ。

また、「ミリーのすてきなぼうし」（二年上）も、同じように「自分だったら、どんな帽子が欲しいだろう」と想像しながら楽しく読むことができます。「こんなときは？」「こんな場所だったら？」と、先生が投げかけることで、いっそう豊かな想像が膨らむでしょう。

成長の過程に寄り添って

新しく中学年に入った「もうすぐ雨に」（三年上）、「プラタナスの木」（四年下）は、

どちらも人物の気持ちの変化を読み取るのにふさわしい作品です。「もうすぐ雨に」が「かえる」に対する気持ちの変化であるのに対して、「プラタナスの木」は、「木」という、風景に近いものに対して抱く人物の気持ちの変化を読み取るようになります。二年間を通して、子どもたちの読みがどう変化するか、学習の積み上げを確かめてみたいものです。

友達との関係が描かれた「なまえつけてよ」（五年）は、クラス替えが多くある五年生の始まりに適した内容です。子どもたちの成長の過程を見ると、「近寄りたいのに、いたずらする」といったように、それまで一体化していた「行動と心情」が逆になるのも、この時期の特徴です。登場人物

「勇太」の行動を、「自分自身と比べてみよう」と投げかけてみてはどうでしょう。

六年の卒業期に配された「かなえられた願い——日本人になること」は、社会や世界に向けて意識が高まるこの時期に、ぜひ出会わせたい文章です。「話す・聞く」教材「今、私は、ぼくは」と関連づけて扱うことも考えられます。

説明的文章

少しづつ高みを目ざす

一年上巻に新しく入った「うみの かくれんぼ」は、文章全体に関わる「初め」の部分があり、そのうえで、複数の事例それぞれに対して「何が、どのように」と説明されています。それまでに学習した「くちばし」と読み比べて、その違いに気づかせることもできます。

学習のつながりという点では、三年一学期教材「こまを楽しむ」にも注目したいと思います。内容だけでなく、論理のおもしろさに気づかせたい中学年では、年間を通して、だんだんにレベルを高めていく配列がなされています。指導計画を立てる際、この後に続く「すがたをかえる大豆」「ありの行列」（三年下）を並べて読んでみる

ことをおすすめします。

また、読書に位置づけられている「里山は、未来の風景」（三年上）は、子どもたちにとって興味深い内容です。これまで教科書になかった文種に出会うことで、読書の幅が広がるでしょう。

自らの生活に目を向けて

高学年には、論理の進め方のおもしろさと、子どもに考えさせたい内容とを兼ね備えた文章が登場しました。「想像力のスイッチを入れよう」（五年）は、筆者の意図を捉えながら、「自分なら、この文章にどんな題名を付けるか」という話し合い活動に広げても、活発なやり取りが期待できます。

「時計の時間と心の時間」（六年）は、書かれている内容を自分の生活と結び付けながら考えさせたい文章です。六年生のこの時期の子どもたちは、データを集めて、それを根拠にスピーチするなどの活動も進んで行います。そうした活動と関連づけることも有効でしょう。そんな学習を通して、実験結果やデータを活用した筆者の論の展開の工夫に気づかせたいと思います。（談）



▲「なまえつけてよ」（5年P20-21）



▲「こまを楽しむ」（3年上P42-43）



かつら・さとし

山口県生まれ。著書に『国語授業のユニバーサルデザイン』（東洋館出版社）、「フリースクールで読みを深める文学の授業」（学事出版）などがある。光村図書小学校『国語』教科書編集委員。

「話す・聞く」動画でモデルを共有する

第二回では、これまでの授業スタイルを変えずに、デジタル教科書の活用に気軽に取り組める実践をご紹介します。今回は、これまでの授業スタイルを改善するために「デジタル教科書を活用した実践」をご紹介します。



東京都生まれ。横浜国立大学大学院教育学研究科修了。横浜市内の公立小学校教諭、主幹教諭を経て、現職。専門分野は、教育学（授業設計、情報教育）、教科教育法。共著書に『タブレット端末で表現する協働的な学び』（フォーラムA）など。

1 「話すこと・聞くこと」のモデル

前回ご紹介した、デジタル教科書を活用している教師を対象とした意識調査によると、「話すこと・聞くこと」領域においてデジタル教科書の効果を実感している教師の割合は、「読むこと」領域に比べて非常に低いことが分かっていました。もちろん、デジタル教科書に収録されているコンテンツ数の差も影響しているのかもしれませんが、しかし、それだけではなく、「話すこと・聞くこと」の授業作り自体に難しさを感じている教師が多いことの表れではないかと、私は感じています。

文字言語で書かれた教科書を使って、音声言語である「話すこと・聞くこと」の力をどう身につけさせたらよいのか、

悩んだことはないでしょうか。これは、私自身の長年の悩みでもありました。

今回は、私のこれまでの実践の中から、デジタル教科書を活用し、子どもたちに「話すこと・聞くこと」の力を身につけさせようとした単元「夢の乗り物発表会をしよう」（二年下「あったらいいな、こんなもの」と、「話し合い活動」をバージョンアップしよう）（四年上「よりよい話し合いをしよう」）の事例をご紹介します。

2 「あったらいいな、こんなもの」（二年）

(1) 単元の指導目標

◎自分が考えた乗り物について、相手に分かるように、話す事柄の順序を考え、声の大きさや速さなどに気をつけ

て、丁寧な言葉で話すことができる。
◎大事なことを聞き落とさないように気をつけながら友達の話聞き、感想を述べたり、質問をしたりすることができきる。
◎互いの話を集中して聞き、話題に沿って話し合うことができる。

(2) 単元の指導計画（全十四時間）

第一・二時

学習の進め方について見通しをもつ。

第三～六時

考えた乗り物の形や働き、あったらいいと思うわけなどについて、二人一組で質問し合い、想像を広げる。

ここで活用！

第七～十一時

話す内容と順序を考え、発表のためのメモを書き、二人一組で発表の練

習をする。

▼第十二～十四時

「夢の乗り物発表会」を開き、相互評価や振り返りを行う。

(3) 活用のポイント

—— モデルと学習課題を共有する

■指導の意図

この時期の子どもたちは、話すことが大好きで、家での出来事や友達と遊んだことなど、教師や友達と積極的に話をする姿が見られました。しかし、その多くは、相手意識が感じられる話し方・聞き方になつておらず、思いついたままの順序で話し、相手が聞きたいことをうまく説明できない子、相手の話を最後まで聞くことができない子が多くいました。

そこで、考えた乗り物について質問し合う学習では、目の前にいる友達が一生懸命に聞き、質問してくれる体験、それに自分が答える体験を、子どもたち全員に積ませたいと考えました。それには、二人一組で取り組ませることが効果的です。

ただ、二人一組での学習活動では、教師が子どもの状況をこまめに見取る必要があります。やり取りに行き詰まったり、話の本筋がそれてしまったりしている二人がいても、教師がそれに気づかないた

めに学習が深まらない、ということもあるでしょう。ですから、活動に入る前に、話し方・聞き方のモデルとなる姿を子どもたちと共有しておくことが重要と考えました。

■紙の教科書だけを使っていたとき

デジタル教科書を活用する以前の授業では、活動に入る前に、紙の教科書に書かれている例や観点を読むようにしていました。

「教科書に書いてあるように、話し手は、『あったらいいな』と思う乗り物の名前『あったらいいなと思うわけ』『できること』『形や色、大きさ』などを伝えましょう」「聞き手はしっかりと聞いて、できることや、形や大きさで分からないことがあったら尋ねましょう」と課題を提示し、活動のゴールを子どもたちにイメージさせます。そして、活動の途中、適切にやり取りし合っている二人の様子を全体で共有し、手本とさせるようにします。こうした手立てによって、モデルと学習課題を全体で共有してきました。

しかし、この手立てでは、モデルの姿を文字言語でしか提示することができません。冒頭でも述べたように、私は、音声言語によってやり取りされるモデルの

姿を、文字言語によって理解・共有させることに限界を感じていました。子どもたち自身が、自分の耳でモデルとなる音声聞いて大切なことを押さえ、実際に自分で音声言語を使うことによってこそ、「話すこと・聞くこと」の力が身につくものと思うからです。

■デジタル教科書を活用した授業では

「音声言語でモデルの姿を共有したい」という私の思いを受け止めてくれたのが、デジタル教科書の「話すこと・聞くこと」教材に収録されている動画です。これを使えば、教科書の例にある話し方・聞き方・話し合い方だけでなく、表情・身振りまで含めた実際の様子を映像で見ることができます。本単元では、この「話す・聞く」動画を活用して、モデルの姿を子どもたちと共有することにしました。

この動画では、二人の子どもたち（平成二十七年版準拠「デジタル教科書」では、「ささきさん」と「ふじいさん」）が、考えた道具についてのやり取りをしています。そこで、学習課題として、「動画に出てくる二人の話し方・聞き方の、よいところを見つけよう」と投げかけることにしました。子どもたちは、映像を見ながら、動画に出てくる二人の話し方・

聞き方のよいところを次々と発見していききました。その後は、紙の教科書を使って、それらのよいところを文字言語で確認するようにします。音声言語は時間とともに消えてしまうため、大事なことについては、文字言語で押さえる必要があるからです。



▲考えた道具について、二人がやり取りする様子が収められている（動画「ささきさんとふじいさんのやりとり」）。

たりといった手立てをとっていました。しかし、話し合いのしかたを感覚的に理解させ、課題意識をもたせることは、なかなか難しいものでした。

■**デジタル教科書を活用した授業では**
デジタル教科書では、話し方・聞き方・話し合い方についての解説音声入りと解説音声なしのもの、二種類の「話す・聞く」動画を見ることができます。解説音声入りの動画は、それを注意深く聞くことで、学習課題をつかむことができるように作られています。解説音声入りの動画を使った授業展開も考えられますが、ここでは、子どもたちに、より主体的に学習課題をつかませたいという思いのもと、解説音声なしの動画を視聴させることにしました。

クラス全体で動画を見ながら、誰かが「この話し方・聞き方はよい」という場面を見つけたら一時停止をし、みんなで再度確認して、よいところを共有していくという学習活動です。子どもたちは、「話題からそれない」「自分の立場をはっきりさせる」「例を挙げて説明する」など、よりよい話し合いをするための観点を次々と見つけていきました。こうして、教科書に書かれた観点をなぞるのではな

子どもたちは、動画に出てくる二人のやり取りの様子をモデルとし、「二人のような話し方・聞き方ができるようにになりたい」という思いをもちながら、学習に取り組むことができました。

3 「よりよい話し合いをしよう」(四年)

(1) 単元の指導目標

◎司会や提案者などの役割を理解し、目的に向かって、互いの考えの共通点や相違点を考えながら話し合うことができる。

(2) 単元の指導計画(全四時間)

▼第一・二時

これまでの学級会・話し合い活動での失敗や、困った経験を振り返り、「よりよい話し合いのしかたを考える」という学習課題を設定し、学習計画を立てる。

▼第三・四時

話し合いの中で司会者と参加者が気をつけなければいけないことについてまとめ、それらに気をつけながら、話題を立てて話し合いを行う。

ここで活用!

く、「話す・聞く」動画から自分たちが見つけ、納得した観点を出し合うことができました。



◀解説音声ありの動画では、話し合いのときに参加者が気をつけることが示される（動画「話し合いの進め方」）。

(3) 活用のポイント

——モデルと学習課題を共有する

■指導の意図

この時期の子どもたちは、学校での活動を積極的に楽しむことができますが、その一方で、自分の思いが強くなり、他者を意識はするものの、時に、自分の考えだけに固執することも少なくありませんでした。「話し合い」とは、お互いの考えを伝え合いながら、一つの出口に向かっていくものであり、一方通行では成り立ちません。そのため、意見や主張の異なる者どうしが合意形成を目指すことはなかなか難しく、うまくいかない場面も多くありました。

また、なかには、人前で話すことが苦手な子、話題を理解することに時間がかかり、なかなか発言ができない子が少なからず見られ、話すことについての個人差があるように感じていました。だからこそ、本単元では、どの子にも意欲的に学習に取り組ませたいと考えました。

■紙の教科書だけを使っていたとき

デジタル教科書を使う以前の授業では、話題を立てて話し合いを行う前に、教科書の例を役割読みしたり、学習指導書付録CDを聞いて気づいたことを出し合っ

その後、「話し合うグループ」と「話し合いを観察するグループ」の二つに分かれて、話題を変えて二回の話し合いを行いました。観察するグループには、話し合いを観察しながら、先ほど見つけた観点に照らしてよくできていると思う友達の話し方をメモに取っておくようにさせます。そして、それを後からクラス全体で確認するのです。もし、クラスにタブレット端末があるなら、それを使って、よいと思う話し合いの様子を録画しておき、後で紹介し合ったり、モデルの姿との違いを比較したりという学習活動を行うこともできるかもしれません。

4 実践から分かること

音声言語による話す・聞く・話し合うモデルの姿を感覚的に捉えさせ、共有するために、デジタル教科書に収録されている「話す・聞く」動画を活用してみました。これによって、子ども自身が自分の学習課題を明確にして、「話すこと・聞くこと」の学習に取り組むことができただけではと考えています。こうした授業改善のため、ぜひデジタル教科書を活用していただければと思います。

新版『書写』教科書

Q&A

「書写好き」に

新しい教科書には、これまで以上にさまざまな工夫が盛り込まれています。その一部をご紹介します。

六年間、
私たちといっしょに
学習していきます。



イラスト：及川賢治 (100%ORANGE)

Q1 これまでの教科書と比べて、
どんなところが新しくなりましたか。

A1 学習を焦点化し、シンプルで分かりやすい紙面を実現しました。また、二年以上の全教材に、「たいせつ」を設置しました。

紙面は、いちばん大切なことを大きく、その他の事例は小さく扱うなど、情報に軽重をつけました。ページを開くだけで、その学習の中で何が重要なかが、先生にも児童にもはっきり伝わります。

そこでの学習のポイントをはっきりと示したのが「たいせつ」です。同じ要素をもった他の文字を書く場合にも、「たいせつ」を見れば、何が大事なかを確認することができます。

「おれ」の書き方

★ほ先は、いつも左なめ上に向ける。
★おれるところで一度筆を止める。

「たいせつ」は、光村図書『国語』教科書にも登場。

Q2 毛筆教材が右ページではなく、左ページにあるのはどうしてですか。

A2 半紙に文字をうまく書くことよりも、「文字の整え方」を学ぶことを大切にしているからです。

各教材は、①観察や比較を通して「文字の整え方」の原理・原則を発見する、②毛筆で書いて確認する、③硬筆で書いて日常の文字に生かす手がかりにする、という流れになっています。文字の整え方を学ぶことを大切にしたのは、原理・原則を学ばば、他の文字にも広く応用が効くと考えたからです。

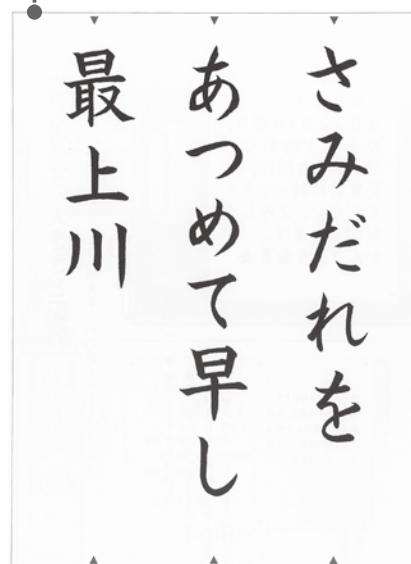
Q3 半紙の枠が紙面に示されていないのは、なぜですか。

A3 教材のねらいに合わせて、半紙の枠を示したものと示していないものがあります。

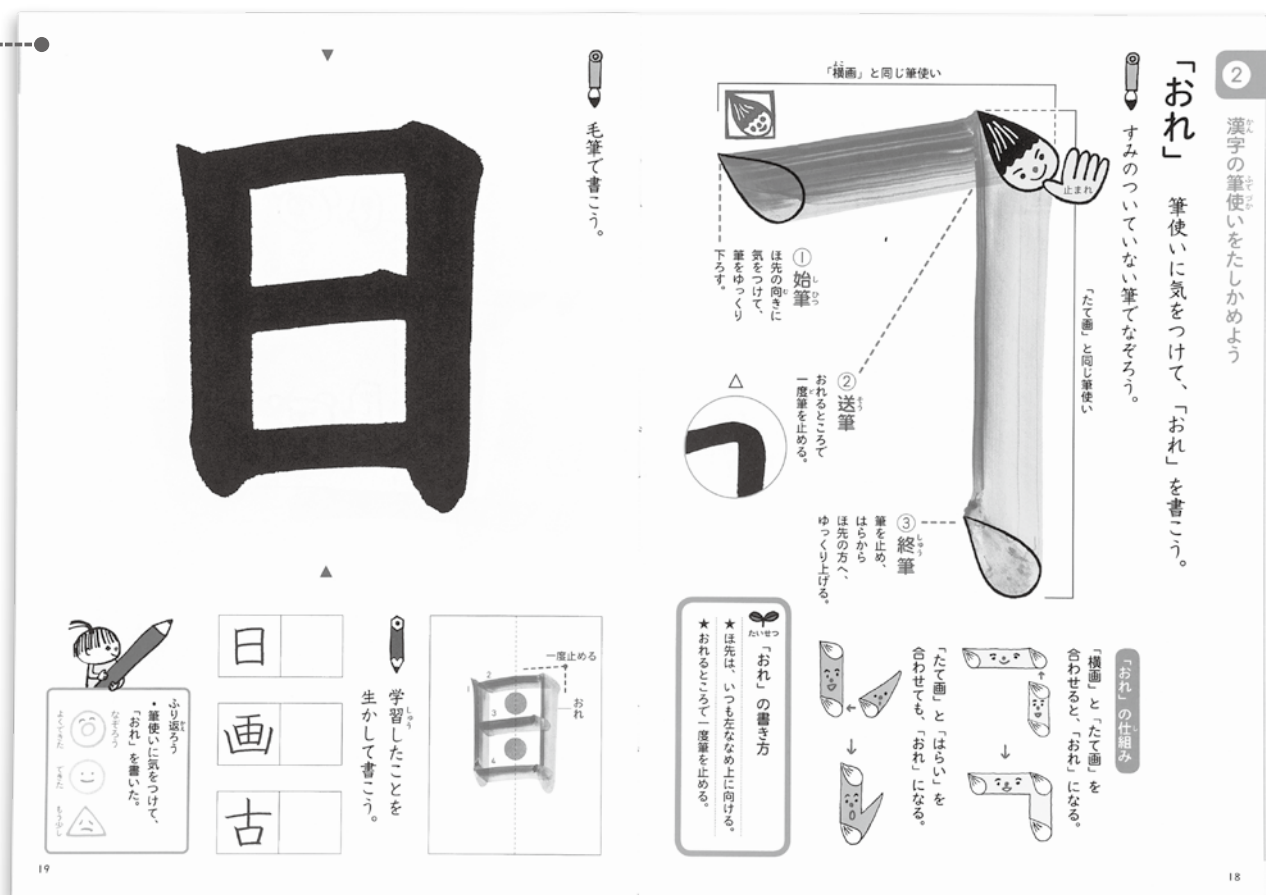
毛筆の筆使いや文字の組み立て方を学ぶ教材では、半紙の中にどう収めるかよりも、筆使いや字形がよく分かることが大事だと考え、半紙の枠を付けずに文字を大きく示しました。一方で、配列を学ぶ教材では、用紙に対してどのように文字を配置するかが分かるよう、半紙の枠を示しました。

文字の組み立て方を学ぶ教材では、教材文字をできるだけ大きく示しました。

配列を学ぶ教材では、半紙枠を示す罫線を提示しました。

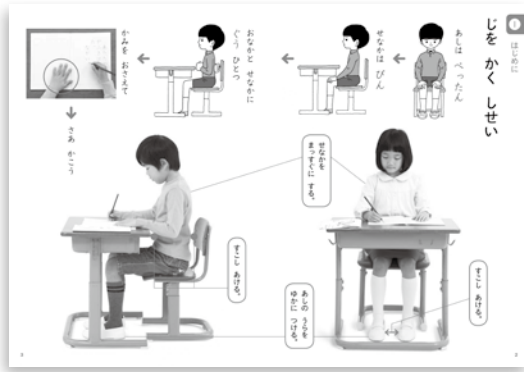


▲「用紙に合った文字の大きさと配列」(6年 P11)



▲「『おれ』」(3年 P18-19)

紙面を見るだけで、何を学ぶのか、何が大切なのかひと目で分かります。



▲「じを かく しせい」(1年 P2-3)

低学年では、唱え歌に合わせて示すことで、学習習慣が定着するよう工夫しました。毛筆を学習する三年以降も、姿勢や筆記具の持ち方がその都度確かめられるよう、見開き二ページで、これを示しました。

A5

姿勢と筆記具の持ち方が習慣として定着するよう、全学年で丁寧に取り扱いました。

Q5

鉛筆を正しく持てない児童が増えていきます。姿勢や執筆については、どのように扱っていますか。

A6

国語教科書と連動する教材を各学年に設定するなど、学んだことがさまざまな場面で生かされるよう配慮しました。

Q6

書写で学んだことを、国語や他教科の学習で生かすために、どんな工夫をしていますか。

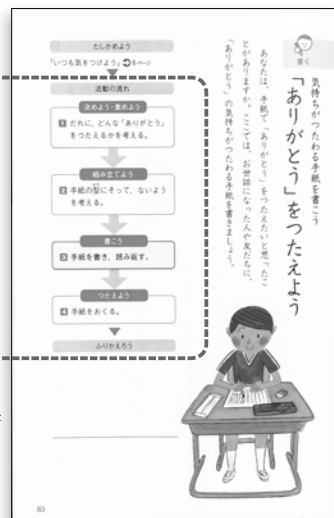
▼国語との関連教材を示すマーク



▲「手紙の書き方」(3年 P16-17)

国語教科書と学習内容・題材・学習時期が同じなので、国語と一体的に扱うことが容易です。

▶「国語」教科書 (3年上 P83)



A4

ここでは、部分の組み立て方を学びます。貼ったりはがしたりしながら、体感的に考えさせることができます。

Q4

四年の十六ページにシールが付いていますが、どうやって使えばいいのですか。

「たれ」の中に入る部分を、中心に貼るとぶつかってしまふ」「少し右に寄せるとうまく収まる」などと試行錯誤しながら、児童が部分の組み立て方を体感的に学ぶことができます。弱粘性のシールなので、何度でも貼り直すことが可能です。児童自身が学習のねらいを明確に捉え、興味・関心をもって取り組めるよう工夫しました。



◀「部分の組み立て方」(4年 P16-17) シールを使って主体的に学習することで、理解がぐっと深まります。

教材文字について

新版教科書では、穂先の動きが分かりやすいように、教材文字を墨と朱墨の二色で示しています。文字を書かれた樋口咲子先生(千葉大学教授)にお話を伺いました。

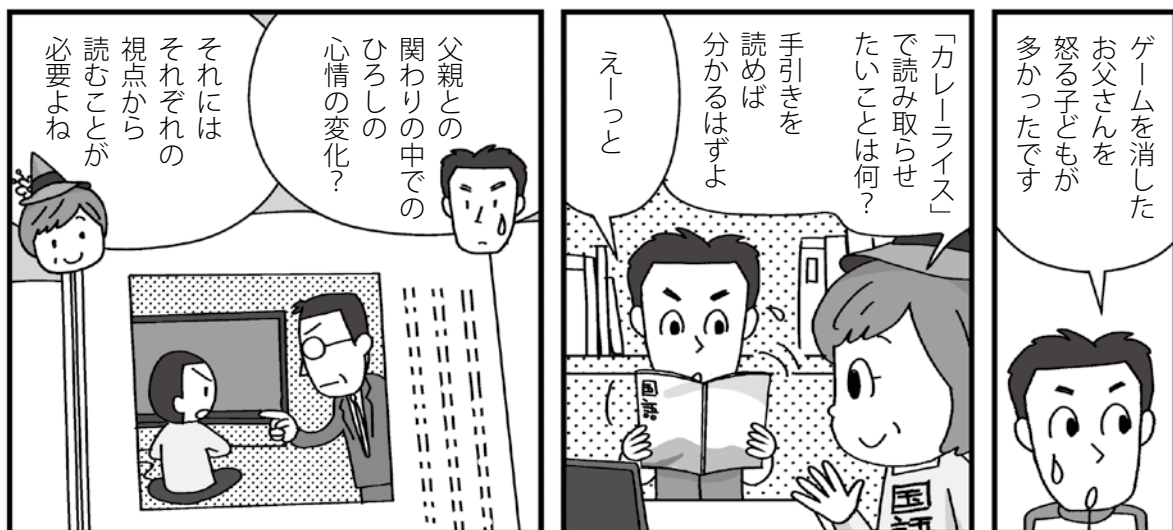
「教材文字を書くときは、素直な『書写』としての運筆を心がけました。穂全体に薄墨をつけ、穂先に朱墨をつけて、点画の接し方が明瞭になるように書いていきます。墨は薄すぎても濃すぎてもだめ。スピードに迷いがあってもだめ。自分の筆の動きがすべて記録されるわけですから、気が抜けません。一教材を仕上げるのに、一時間書き続けたこともあります。

点画がしっかり書けると、子どもたちはとても喜びます。穂先の動きに気をつけると、しっかりとした点画を書くことができるので、教科書やDVDを十分活用していただきたいと思います。」



▲教材文字を書く樋口先生。(学習指導書付録DVDの撮影風景)

こしみず・かおり
 広島県生まれ。玉川大学教師教育リサーチセンター客員教授。23年の教員生活の後、港区教育委員会指導主事、東京都教育庁主任指導主事、小学校校長等を経て、現職。光村図書小学校『国語』教科書の編集委員を務める。

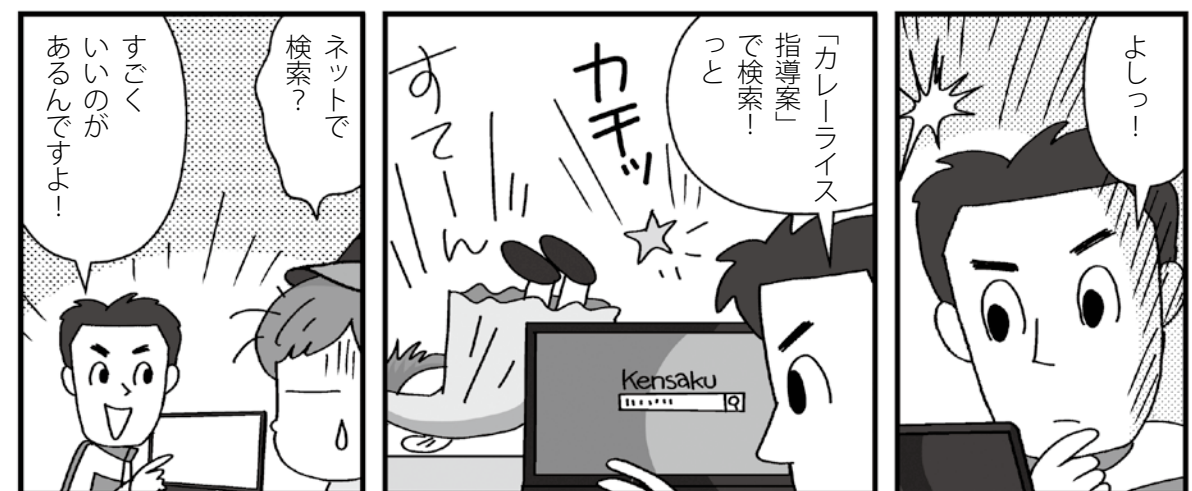
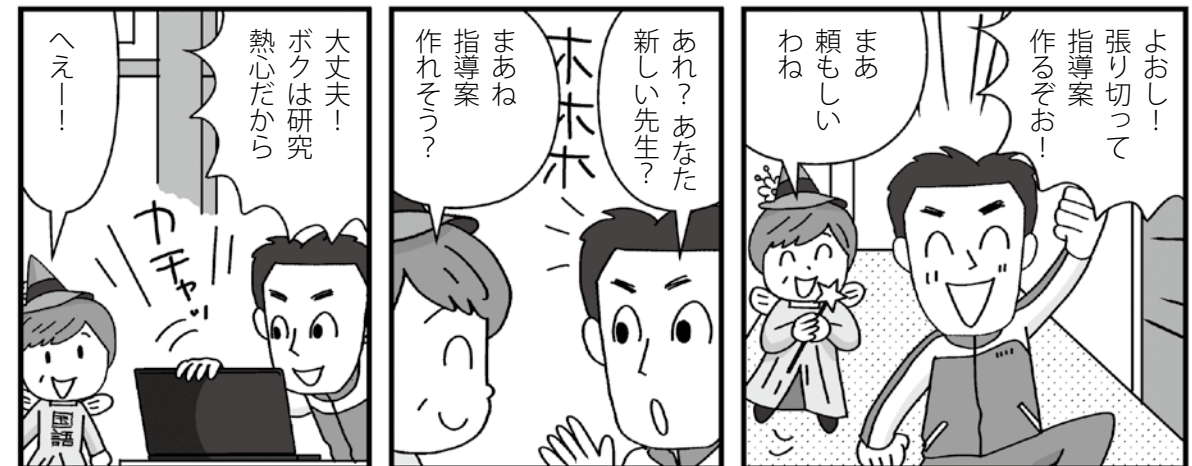


なるほど国語指導
 妖精コッシーが教えます 3



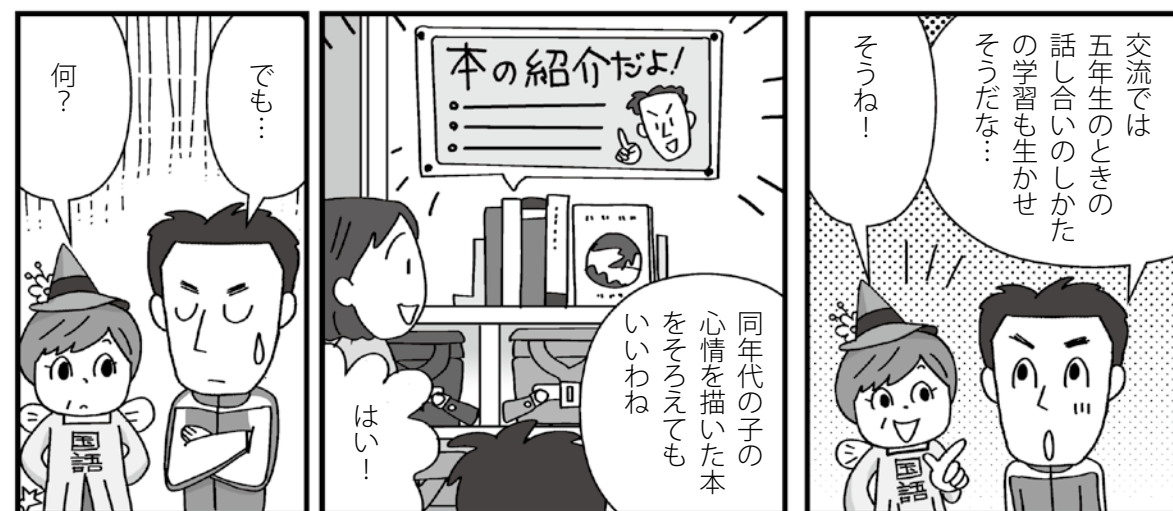
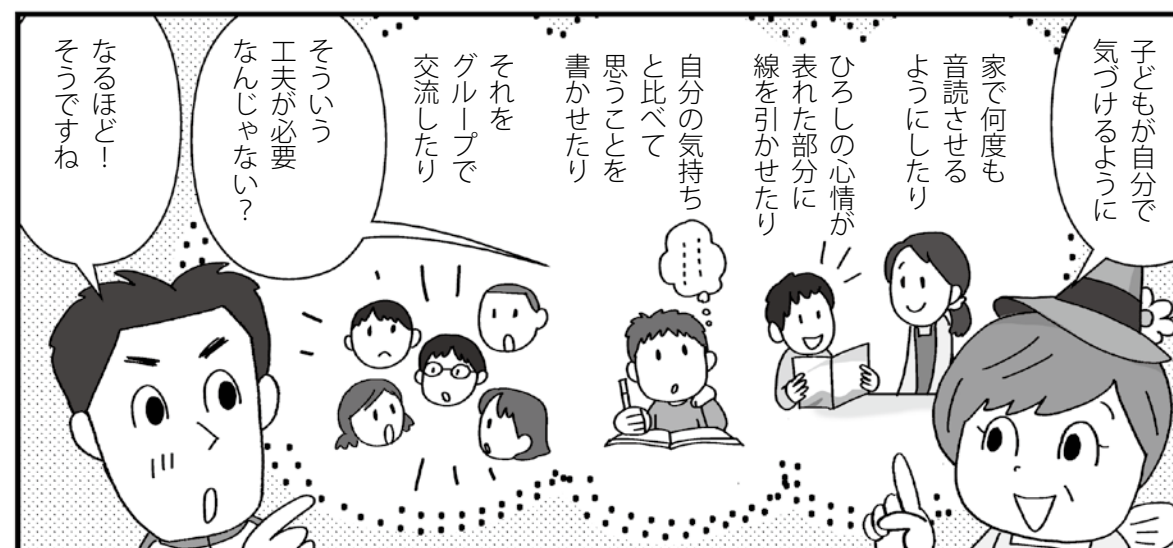
子どもあつての指導案

作・画／あべかよこ 監修／興水かおり





指導案を作成するときには、子どもの反応を思い浮かべることを勧めます。「この発問に、あの子なら……」と、支援の手立ても浮かび、使える指導案、生きた指導案になりますよ。(コッシー)



2015, いっしょにはじめませんか。
これからの学び。



学びの限らない未来をひらく。
光村図書のデジタル教科書。

体験版はホームページよりダウンロードできます。
www.mitsumura-tosho.co.jp/digital/

小学校
指導者用

平成27年度版小学校教科書準拠



CoNETS 版
デジタル教科書

小学校
学習者用

「国語デジタル教科書」

光村「国語デジタル教科書」1～6年

DVD版

各72,000円＋税

ダウンロード版

各23,000円＋税

光村「書写デジタル教科書」1～6年

DVD版

各21,000円＋税

ダウンロード版

各 7,000円＋税

光村「社会デジタル教科書」5年 6年

DVD版

各72,000円＋税

ダウンロード版

各23,000円＋税

光村「せいかつデジタル教科書」上下巻

DVD版

60,000円＋税

ダウンロード版

20,000円＋税



ともに学ぶ授業に

伝え合う力が
身につく授業に

個に応じた授業に

ご好評をいただいている指導者用と共に、
平成27年度版として現在開発中!!

商品の情報につきましてはホームページにて
随時公開予定です。

DVD版

使用期間は、平成27年度版教科書の
使用期間内です。

ダウンロード版

1年単位でのご使用も可能となりました。
使用期間は、左記期間内の1年間です。

※指導者用デジタル教科書は学校フリーライセンスです。学校フリーライセンスとは、
校内でご利用になる指導者用パソコンの台数を制限しない契約です。



光村図書は、
CoNETSに参画しています。
www.conets.jp

光村図書出版株式会社
TEL: 03-3493-5741 (デジタル教材お客様窓口)
FAX: 03-6721-6884
E-mail: digital-info@mitsumura-tosho.co.jp



光村図書

国語 平成27年度用教科書 誤りのお知らせ

平成27年度用教科書に誤りがございました。謹んでお詫び申し上げますとともに、ご指導の際には十分ご留意くださいますようお願いいたします。

■6年「カレーライス」(17ページ2～3行目)

2行目と3行目の間が1行空くべきところ、空きがない形となっております。今年度配本された教科書ではこの誤りが訂正されておりますが、この箇所には1行空きが入り、場面が分かれるものとしてご指導いただければ幸いです。

教科書の変更に伴う取り扱い内容の異動について

弊社『国語』教科書では、平成23年度版の3年で扱っていた「ことわざ・故事成語」を、平成27年度版から4年で扱うことに変更いたしました。そのため、新4年生には、当該事項を学習していただく時期に合わせて、学習用資料をご用意いたします。なお、資料につきましては、本誌次号に掲載予定です。

宮澤正明 編

新・字形と筆順

宮澤正明 編

光村図書
定価：本体1,800円＋税
360ページ 四六判
ISBN978-4-89528-679-4

板書の文字、
気になったことは
ありませんか？

光村図書の書写ハンドブックの決定版！

- 光村図書「書写」教科書 編集委員による手書きの文字
 - 教科書体活字に即した書きぶり
 - 全文字に間違えやすい部分に配慮した筆順分解を提示
 - 日常に役立つ、毛筆楷書、硬筆楷書、硬筆行書の3種を提示
 - 字形のポイント、許容についての図示
- ☆付録として「筆順チェックシート」も！

好評発売中!

新・字形と筆順